様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１０１

研究課題名（和文）人種とゴシック：フォークナーとワイドマンの小説の比較研究

研究課題名（英文）Race and Gothic: A Comparative Study of Fiction of Faulkner and Wideman

研究代表者
山内　玲（Yamauchi, Ryo）

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：６０６０９８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、William FaulknerとJohn Edgar Widemanの小説を、アメリカン・ゴシック批評の文脈におき、人種という見地から検討する。この白人作家と黒人作家の研究は、社会的文脈を視野に入れるようになったアメリカン・ゴシック批評の動向を受け、ゴシックというジャンルにおける小説手法の問題を問い直すという意義を持つ。とくにWidemanのPhiladelphia Fireに関する研究については、William ShakespeareのThe Tempestの翻案という正統的な文学史の問題を黒人の男性性という見地から再検討するという意義も併せ持つ。

研究成果の概要（英文）：This study aims at considering racial aspects of the fiction of William Faulkner and John Edgar Wideman within the context of American Gothic criticism. With the critical trend of the 1990s rereading American Gothic novels in the historical context in mind, the examination of the works of the white male writer and the black male writer sheds light on the generic questions of the narrative technique. In particular, my study of Wideman's Philadelphia Fire assumes significance due to the analysis of its appropriation of Shakespeare's The Tempest, a canonical play in the literary history of USA as well as England, in terms of black masculinity.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：Faulkner　Wideman　Afro-American Literature　race　The Tempest　black masculinity

１．研究開始当初の背景

本研究は以下 3 つの点から着想に至った。(1)William Faulkner の作品における白人性をジェンダー・セクシュアリティの問題を視野に入れつつ研究するという、これまでの研究テーマの延長上に着想を得た。(2)Faulkner の作品研究を継続する上で、同時代の黒人作家 Zola Neale Hurston とその歴史的文脈に関心が拡大した経緯があり、それらの黒人文学の伝統を受け継ぐ黒人作家 John Edgar Wideman を考察対象として特定したのも、その経緯に由来する。(3)そして最後に、最も直接的な着想のきっかけとなったのが、2012 年 1 月に行なった招待講演と、それをもとにした学術論文におけるアメリカン・ゴシックの短編の考察である。1996 年に作家 Joyce Carol Oates (1938-)の編纂によって出版されたアンソロジー *American Gothic Tales* に収録されている短編を、その間テクスト性を意識した編纂方法と共に分析することにより、1990 年代の批評の動向との連続性とともに、心理学や社会学・歴史学などの外在的な学問に依存することなく、小説手法の分析という文学研究の方法論において研究を遂行するという、本研究の着想により明確な方向性を加えることとなった。

２．研究の目的

本研究の目的は、アメリカン・ゴシックというジャンルに含まれる小説を、正統的な文学史の見直しという研究史上の文脈に置いた上で人種という観点から検討し、特に白人男性作家 William Faulkner(1897-1962)と黒人男性作家 John Edgar Wideman (1941-)という、難解なモダニズム的手法において知られる二人の作家の小説を考察することである。

本研究の意義を説明するにあたり、まずは先行研究に対する位置づけを確認しておきたい。アメリカン・ゴシック小説とそれを巡る批評の言説を考察する上でアメリカ文学史との関係を抜きにして語ることはできない。アメリカ合衆国がイギリス植民地から作られた国家であり、ヨーロッパとくにイギリスからの違いを強調して新しさと若さを謳う国家のアイデンティティ形成に 19 世紀までのアメリカ文学が大きく寄与したことは多くの論者の述べてきた所である。「アメリカ」のゴシックを語る際にも、18 世紀後半のゴシック・リバイバルに伴いイギリスで流行したゴシック・ロマンスから派生したという説明にとどまらず、その独自性を強調する姿勢において、正統的なアメリカ文学史の言説と軌を一にしている。とはいえ、Teresa Goddu が *Gothic America: Narrative, History, and Nation* (1997)で述べるように、20 世紀前半のアメリカ文学のキャノンの形成期において、ゴシックという「ふざけた」ジャンルは「まじめな」文学史の正典形成から排除されてきた。このアメリカン・ゴシックという語が文学史の中で定着する契機となったのが、Leslie Fiedler の *Love and Death in American Literature* (1960)である。Charles Brockden Brown の *Wieland* (1798)をアメリカ小説の起源として取り上げながら、同時にそれをアメリカン・ゴシックの起源に位置づけることにより、超自然的な現象が登場する小説こそアメリカ文学の特徴だという言説を定着させたのである。さらに Fiedler の批評は、その主張のみならず心理学的な解釈を取るという方法論においても、心理・内面性の重視というアメリカン・ゴシック批評の言説にも先鞭をつけた。八木敏雄の『アメリカン・ゴシックの水脈』(1992)という、日本国内のアメリカン・ゴシックの研究を代表する研究書もまた、アメリカン・ゴシックの独自性を強調し、その独自性として内面・心理の問題を追及する点を重視するという意味で、Fiedler 以来の批評の系譜に位置づけられる。こうした批評は、社会的な問題を排除する非歴史的な批評であったとも言えるのだが、本研究はそれに対して生じた 1990 年代以降の批評の動向の変化に応じて、人種とジェンダーに関する社会的文脈を視野に入れる。1980 年代以降のフェミニズム批評や新歴史主義的批評による白人男性中心のアメリカ文学史の再評価という展開を経て、1990 年代のアメリカン・ゴシック批評においても、心理学的解釈を取る論者が人種や性の問題を手掛かりとして社会的文脈に視野を広げ「抑圧の回帰」という心理学的主題をアメリカ社会の問題に結びつける方向に向かった。他方アメリカ合衆国の文脈で社会的に抑圧された存在として、黒人の問題をアメリカ合衆国の国家的なナラティヴにおける抑圧の回帰としてとらえた研究が 1990 年代以降台頭してきた。この動向は、白人作家の作品において「黒さ」という曖昧な表象の下で不可視化されるアフリカ系アメリカ人の問題を考察した Toni Morrison の *Playing in the Dark* (1992)に多大な影響を受けており、前述の Goddu の研究や Robert K. Martin と Eric Savoy の編纂による研究論集 *American Gothic: New Interventions in a National Narrative* (1998)などがその系譜に位置づけられる。

以上の研究動向が本研究の拠って立つ指針となるのだが、それに加え、なぜ Faulkner と Wideman という二人の作家を比較考察するのかという理由とその意義を Faulkner 研究の文脈に置いて明らかにしたい。2013 年にミシシッピ大学で開催された研究大会 Faulkner & Yoknapatawpha Conference では「フォークナーと南北アメリカの黒人文学」という題目で、Faulkner の同時代人から現代作家に至るまで多数の黒人作家との比較において Faulkner 文学が議論された。この大会の成果は後に *Faulkner and the Black Literatures of the Americas* (Jay Watson & James G. Thomas Jr., eds. 2016)に研究論集として出版されている。Faulkner と同じノーベル賞作家である黒人女性作家 Toni

Morrison との比較研究は以前から盛んになされていたが、それ以外にも多様な黒人文学を視野に入れた議論は重要な意義を持つ。しかしながら、この研究論集において Wideman と Faulkner を比較する論考はない。他方、アメリカン・ゴシックという観点から見れば、Faulkner におけるゴシックというジャンルの研究は盛んに研究されている一方、Wideman もまたゴシック的意匠を用いて作品を書く作家であることは知られている。本研究は、ゴシックと人種という観点から Faulkner と Wideman の作品を考察することにより、白人作家と黒人作家の比較研究に新たな知見を加えていくことにその意義を見出すことができるといえよう。

３．研究の方法

Faulkner と Wideman の著作(一次文献)とそれに関連する先行研究・関連書籍(二次文献)の文献調査を行ない、それに基づき個々の作品分析と考察を行なう。

４．研究成果

本研究の成果を報告するのに先立ち、上記の研究着想時の背景と研究目的に関して、当初予定されていた計画において 2 点の大幅な変更を行うことになった経緯を説明する。1 つは本研究代表者の本務校の変更に由来する。2016 年 4 月より東北大学大学院国際文化研究科に着任するに当たり、その前月の春季長期休暇期間に予定していた研究作業が、前任校の香川大学から転出に伴う移転業務により、大幅な研究時間の削減を余儀なくされた。そこで当初予定していた Wideman と Faulkner の比較を研究論文という形で行うという計画を変更し、それぞれの作品の考察を個別に進めた次第である。もう一つは Wideman を巡る先行研究の調査により、アメリカン・ゴシックというジャンルから正典的なアメリカ文学史の見直しを行うという先行研究の文脈を拡大し、正典的な古典であるシェイクスピアの『あらし』の翻案の歴史に位置付ける作業を行う方向に軌道修正したことである。この変更を行ったのは、白人男性を中心として形成されてきた正典的なアメリカ文学に対し、常に何らかの形で批判的な改変の姿勢を取らざるを得ないというアフリカ系アメリカ人作家の文学作品の歴史的特性に鑑みて、本研究をより大きな視野から研究していく展望を得たためである。

以上の変更点を踏まえた上で、成果として報告すべき研究論文に、Zola Neale Hurston の作品における男性性の研究を挙げることができるだろう。この研究論文は、基本的には研究代表者が本研究に先立ち従事していた「所有とジェンダー:フォークナーとハーストンの小説の比較研究」(科研費課題番号:23820034)の成果によるものであるが、同時に本研究における Wideman の作品における男性性の考察を進めることにより、本研究期間中に執筆され発表された論文「*Their Eyes Were Watching God* の男性性表象に見る Zora Neale Hurston の人種意識」では、議論を深化させることが可能となった。端的に言えば、女性作家が批判的に描く男性性と、男性作家が内在的に問題化する男性性との対照性を確認できたことが議論を深めた要因の一端であるが、そうした対照を経た後に Hurston の示す男性性の批判がとりわけ所有という問題に根差しているということを明らかにした。

本研究とは関係ないテーマではあるが、同研究期間中に“The Use of the Word “Child” in Edith Wharton’s *The House of Mirth*”という研究論文を発表したことも付記しておく。*The House of Mirth* における主人公 Lily Bart が女性であることを時には自ら演じ時には強いられる状況において、女性であることの困難が “child”という語の使用によって効果的に示されていることを明らかにした論考である。

次に本研究期間中に行った 2 つの研究発表が成果として挙げることができるであろう。一つ目は、2016 年 6 月 12 日に開催された中・四国アメリカ文学会第 45 回大会シンポジウム「アメリカ文学の独立」(於広島経済大学立町キャンパス)で、「*Philadelphia Fire* にみる *The Tempest* の翻案と黒人男性であることの困難」という題目で発題した発表である。以下概要である。

「アメリカ文学の独立」というテーマは、建国期から 19 世紀中盤までのニューイングランドを中心として、アメリカ合衆国の旧宗主国たるイギリスへの文化的な対抗意識に由来するものであろうが、そのような枠組みのもとでアフリカ系の文学はいかなる位置づけにおいて語ることができるか。Wideman は、イギリス文学のキャノンたる戯曲『あらし』の翻案を黒人の児童に演じさせるというエピソードを中核に据えた代表作 *Philadelphia Fire* において、主人公 Cudjoe に現代のインディペンデンス・スクエアにおいてその都市の過去の歴史を幻視として追体験させ、1805 年のイギリスの圧制からの解放を祝う式典に、黒人奴隷が強制的に駆り出される様子を描き出す。こうした場面から引き出されるのは、果たして「独立」という事象がアフリカ系アメリカ人の観点から見て、無条件に言祝がれたり、声高に唱えられたりするような事象であったか、という問いである。

こうしたシンポジウムのテーマに対する応答的な問題意識の下、本研究代表者は議論の視野を 20 世紀の文学にまで広げ、旧宗主国文化に対する意識がアフリカ系アメリカ人の作品ではどう変奏されるのか、という問いを設定し、『あらし』の翻案の二つの系譜について概観した上で、*Philadelphia Fire* の翻案にみられる黒人男性の問題を論じた。具体的には以下の三点を検討した。初めに、

20 世紀の『あらし』の合衆国文学への翻案が、19 世紀の旧宗主国に対する対抗意識ではなく、イギリスの文学的遺産を変奏し、アメリカ文学の伝統に据えるプロセスを確認した。次にそうした文化的領有の歴史と軌を一にしながらも、アフリカ系アメリカ人作家による『あらし』の翻案がいかにカリブ海の反植民地主義運動の展開を経てなされたのか、という点を明らかにした。そうした翻案の歴史にワイドマンの作品を位置づけた後、最後に *Philadelphia Fire* における『あらし』の翻案について小説の展開と手法という見地から検討した。

研究成果となるもう一つの研究発表は、2016 年 11 月 19 日に開催された日本英文学会東北支部第 71 回大会(於秋田カレッジプラザ)で、「*The Sound and the Fury* における南部白人 Quentin Compson の苦悩とイタリア系移民の兄妹の役割」という題目で行った。概要は以下の通りである。

本発表の目的は William Faulkner の *The Sound and the Fury* におけるイタリア系移民の兄妹の役割を考察することである。20 世紀初頭から中盤までのアメリカ社会の移民感情とイタリア系移民の同化という歴史的文脈に本作を位置づけた上で、Quentin とその妹 Caddy との対応関係を連想させるイタリア系移民の兄妹を、自殺に至る南部白人青年の意識の流れに対する単なる書割にとどまらず、その精神的崩壊の過程を促進する役割を担っていることを明らかにする。議論の過程で、Quentin の近親姦幻想を 1920 年代の移民排斥主義の象徴としてみなす Walter Benn Michaels の *Our America* において捨象された知見、即ちその幻想を南部白人社会の精神性の変種とみなす先行研究の知見の意義を Quentin の近親姦幻想における南部特有の白人性の分析を通じて再確認した。加えて、Caddy の記憶の投影と解釈されるのに加え、白人社会の他者たる黒人と同一視された移民として、従来の批評において二重に他者化されてきた「黒い」イタリア系の娘の役割として、Quentin の南部白人としての存在様式を揺るがす意義を明らかにした。具体的には、黒人と混同されていたという点だけを指摘するだけにとどめる先行研究において、イタリア系移民が白人としてアメリカ社会に同化するプロセスが看過されており、その点こそが Quentin の物語のクライマックスをもたらす呼び水となり、彼が自らの近親姦幻想において、罪を浄化する炎という空想の下に抑圧していた黒人性を顕在化するのである。

以上 2 つの研究発表は、2017 月 5 月現在投稿論文として執筆中であり、今後査読誌に投稿する予定である。また、Wideman に関する議論に関しては、2017 年度より開始する「アフリカ系アメリカ文学におけるカリブ海文学・思想の受容と影響に関する研究」(研究課題番号：17K13405)において継続的に研究を発展させていく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① <u>山内玲</u>　「*Their Eyes Were Watching God* の男性性表象に見る Zora Neale Hurston の人種意識」『香川大学教育学部 研究報告』 第 I 部第 145 号 2016 年 3 月　pp. 49-58．査読無

② <u>山内玲</u>　“The Use of the Word “Child” in Edith Wharton’s *The House of Mirth*”『柴田昭二先生御退職記念論文集』(香川大学教育学部人間発達環境課程国際理解教育講座) 2016 年 3 月　pp. 57-66．査読無

〔学会発表〕（計　2　件）

① <u>山内玲</u>　「*The Sound and the Fury* における南部白人 Quentin Compson の苦悩とイタリア系移民の兄妹の役割」日本英文学会東北支部第 71 回大会 2016 年 11 月 19 日 於秋田カレッジプラザ

② <u>山内玲</u>　「*Philadelphia Fire* にみる *The Tempest* の翻案と黒人男性であることの困難」中・四国アメリカ文学会第 45 回大会シンポジウム「アメリカ文学の独立」2016 年 6 月 12 日　於広島経済大学立町キャンパス

６．研究組織

(1)研究代表者

山内 玲（YAMAUCHI Ryo）
東北大学・国際文化研究科・准教授
研究者番号：60609874